

新企画「現場の視点」は、全国の地方公共団体などが実施する、地域の特性を活かした独自性のある、効果的な施策や取り組みなどを採り上げます。

墨田区における後継者・若手経営者育成 (フロンティアすみだ塾)

運営主体：すみだ次世代経営研究協議会
支援機関：東京都墨田区産業観光部経営支援課

1. フロンティアすみだ塾とは

墨田区は、近代産業の発祥地のひとつであり、金属・ゴム・繊維など様々な業種が備わった「産業のまち」「ものづくりのまち」として発展してきた。産業構造をみると、都内でも製造業の比率が高い。令和3年現在、区内事業所数は約1万4900事業所となっており、多種多様な業種の集積を生かした異業種企業同士の交流活動が盛んな地域である。高度経済成長期には、働いている区民の多くが区内で就業していたことから、中小企業の振興は区民生活の向上や街の活性化に大きな関わりを持っていた。そのため区では昭和54年に全国初の「墨田区中小企業振興基本条例」を制定し、区民、中小企業、区が一体となって、区内の中小企業の振興を推進する基本方針を明らかにし、現在まで各種施策を展開してきた。しかし、近年、事業主の高齢化、後継者不足、創業数の減少、廃業による事業所数の減少に加え、新技術の急速な進展やアジア諸国・新興国との国際競争の激化等により、本区の就業構造にも変化が生じており、大きな特徴であった産業集積のメリットは徐々に薄れつつある。こうした時代の転換期の中で、「中小企業のまちすみだ」として、本区の産業集積を維持・発展させるため誕生した施策が、後継者・若手経営者育成ビジネススクール「フロンティアすみだ塾」である。

「フロンティアすみだ塾」は、中小企業の円滑な事業承継と、すみだの次代を担う後継者及び若手企業人、いわゆる「フロンティア人材」の育成を図り、もって地域経済の発展と活性化に資することを目的とする、私塾形式のビジネススクールである。平成16年度に本事業は開始され、以降、現在に至るまで213名の修了生を輩出している。卒塾後にも、区事業へ積極的に参画される修了生も多く、修了生同士のコラボ企画により本区産業を国内外へ広く発信を行うなど、地域産業をけん引する人材も多数輩出され、本区の産業振興にも大きく寄与している。運営主体は、区内産業人、塾の修了生等で組織する「すみだ次世代経営研究協議会」となっており、区は当該団体に補助金を支出し支援を行うとともに、協議会の事務局としても積極的に運営補助を行っている。本年度、開講20周年の

節目を迎える「フロンティアすみだ塾」であるが、協議会委員や修了生の方々のご尽力により、今もなお、その熱は冷めることなく、社会経済状況の変化の激しい今日においても、本区の産業活性化の礎となり続けている。語り尽くせぬ魅力の多い「フロンティアすみだ塾」であるが、その事業概要は以下のとおりである。

【フロンティアすみだ塾の事業概要】

○理念

塾生が相互の全人格的な付き合いにより、成功・失敗等の経験、発想、経営者としての覚悟、志、社会的使命感等を共有することで、直面する様々な課題を自ら考え、克服する力を鍛錬・養成する。

○塾頭

関 満博氏（一橋大学 名誉教授）

○対象

- ① 中小企業の後継者又は若手経営者
- ② 区内在勤者又は区内在住者
- ③ 20歳からおおむね45歳までの者

○入塾条件

以下①～④の全てを満たすこと。

- ① 原則全ての講義に参加できること。
- ② 全ての講義を意欲的に受講すること。
- ③ 課題（各講義及び課題図書のリポート等）に意欲的に取り組むこと。
- ④ 地域経済の発展と活性化に寄与する取組を積極的に行うこと。

○費用

受講料 10万円

○選考方法

書類審査及び面接審査

○2024年度（第19期）カリキュラム

回	日時		テーマ・内容
	4月23日（火）	オリエンテーション	[入塾前の心構え] 塾の進め方
1	5月18日（土）	開講	[開講式] 講演、自己紹介
2	6月8日（土）	スタートアップ期	[意識改革] 『人間魅』あるリーダーを目指して
3	7月13日・14日（土・日）		[体験演習] 経営シミュレーションゲーム
4	8月3日（土）	経営学習期	[経営入門] 会社を経営するために～経営者として必要な視点～
5	9月7日（土）		[経営環境] 社会経済の実態と中小企業の対応戦略を学ぶ
6	10月4日・5日（金・土）		[合宿] 地域の後継者・若手経営者との交流・意見交換、企業見学
7	10月26日（土）		[区内企業見学]
8	11月23日（土）	経営戦略形成期	[経営戦略] 自社の経営戦略を考える
9	12月14日（土）		[経営手法] 経営者の事例に学ぶⅠ
10	2月1日（土）		[明日のすみだを拓く大交流会] オープン講義、大交流会
11	2月22日（土）		[経営手法] 経営者の事例に学ぶⅡ
12	3月15日（土）	閉講	[閉講式] 経営戦略の発表

2. すみだ次世代経営研究協議会会長の想い

第19期会長 株式会社和興 代表取締役社長 國分 博史

創業1929年。90年以上両国の地で縫製業を営む4代目。環境負荷を軽減した『和紙』100%素材のアパレル製品を開発し独自のブランドを立ち上げるなど、メイドインジャパンの技術と可能性を追求している。一方地域の催しへの参加や、地域の個人商店やスポーツチームのユニフォーム製作を通じて、地場に根差した活動にも積極的に取り組んでいる。



私は「フロンティアすみだ塾」の12期生として参加させていただき、1年間、様々な業種の若手経営者や先輩経営者との全人格的な付き合いを通じて、経営者としての志を高めることができました。中小企業経営者として、採用や資金繰り、事業承継、自社製品開発など抱える課題に共通点があり、一年間の学びを共にする同期はもちろん、先輩経営者との関わり合いから、経営における具体的な解決策を見出すことができる機会となります。

墨田区の地域産業には、縮小を続ける第二次産業の製造業が多く存在します。特に、ファミリービジネスの小規模製造企業が多く、外部環境の変化の影響を受けやすい下請け型の事業を営まれている特徴があります。私自身も、1980年代から縮小を続ける繊維製造業に身を置きます。国内のアパレル製品の輸入浸透率は1990年の50%程度から、2022年には98.5%に推移しています。つまり、日本製のアパレル製品は現在の日本マーケットにおいて2%も流通しておらず、この傾向は進行しています。その将来を描きにくい経営環境のなか、すみだ塾での学びをきっかけに課題と向き合い、自社の強みを整理した上で、次への方向性をもとに活動しています。具体的には、提案型ビジネスへ切り替えること、価格決定権を持つ仕事をする事、海外マーケットへのチャレンジをすることをビジョンに掲げています。

フロンティアすみだ塾には、20年間繋がれてきた「恩送り」の文化があります。それは、たくさんのご縁と学びから得られた成果を次なる後輩経営者へ伝えていくものです。フロンティアすみだ塾は講師からの一方的なインプットだけではなく、OB・OGである修了生と意見を交わし、志を高めていくのです。その脈々と繋がる文化のもと、私も微力ではありますが、いただいた御恩をお返しするため、現役生の皆様に貢献したいという気持ちで2023年度から会長をつとめさせていただいております。

次世代を担う後継者、若手経営者の方々においては、第二創業的マインドを持ち、不易流行を実行することで、大変な環境であるとは思いますが、同時に大いなる可能性があることを是非お伝えしたいです。幅広い経験・知識をもつ講師の方々や、区内外の魅力ある経営者の方々から具体的な経営戦略を学び、人間力を磨き、チャレンジすることに勇気をもてる環境があります。

この中小企業の強固なネットワークからなるフロンティアすみだ塾の20年の文化がこれからも継続し、若手経営者にとって、夢を持ち、勇気が持てる組織であり続けることを心から願います。

3. 受講風景

修了生の参加が多いワークショップ



熱弁をふるう関塾頭の講義



4. 現場の視点

東京都墨田区（城東地域）は、東京23区内で大田区（城南地域）に次ぐ工場数を誇り、印刷・紙加工、金属製品など様々な業種が混在している。その多くは従業員数10名未満の小規模事業者である。また全国初の中小企業振興基本条例を制定したことで知られているが、もともと企業同士の交流が盛んな産業集積地域である。

今回採り上げた「フロンティアすみだ塾」は、歴史的にも中小企業振興に積極的であったこの地域で実施されているもので、墨田区もこれを20年も前から継続してサポートしている。

前掲の事業概要からもわかるように、ここは単なる勉強会や親睦会ではない。そもそも入塾には書類審査・面接審査でやる気が問われ、カリキュラムをみてもその本気度が窺える。まさに「人を育てるとは、こういうことか」と再認識させられる。塾頭には著名な経営学者を配し、理論から実践までを徹底的に勉強するのである。新しいビジネスの創造や経営課題の克服など、中小企業の現場の課題に正面から取り組む姿勢は特筆に値する。

しかも年間10万円の費用でここまでできるのは、区サポートもあるが、その運営自体を修了生が担っているからでもある。修了生に「なぜそこまで協力できるのか」と聞いてみたが、口をそろえるように「自分たちもこの塾に育ててもらった。だから今度はその塾に恩返しをしたい」と。塾頭によれば「合宿では、今でも夜通し議論することもある」という。古くから企業同士の交流が盛んであったこの産業集積地で、中小企業経営者が今でも「全人格をかけて」次世代経営者を育てているのである。

来春には卒塾する今期の塾生に、その成果を語ってもらいたい。

（商工総合研究所主任研究員 小林順一）